

日本へ来たてのワタシ

newsletter



筑波大学大学院修士課程国際教育専攻の
18. NGUYEN NGOC LAN CHI



今回は、文部科学省奨学金（MEXT）を受けて留学中の筑波大学大学院修士課程国際教育専攻のNguyen Ngoc Lan Chiさんと面談する機会をいただきました。チさんの初めての来日は2015年、高校2年生のときに参加した6週間の短期留学プログラムです。2019年から長期留学中です。

日本第一の印象



2015年の夏に初めて日本に来たとき、先生方が迎えてくださり、私たち4人のために短期滞在用のアパートを借りてくださいました。そこで4人一緒に生活することになりました。日本では、毎日日本語を勉強したり、茶道や生け花などの日本文化を体験したりしました。6週間の体験を通して、日本にはとても面白い文化がたくさんあり、またそれらの文化が大切に守り続けられていることを実感しました。

来日前は東京のような大都市、発展した街をイメージしていましたが、実際に来てみると、その賑やかさの一方で、畑や田んぼといった穏やかな風景もまだたくさん残っていることに気づきました。

印象に残っている思い出のひとつは、登山に行った時のことです。休憩のときに日本人の先生が「みんなでお昼を食べて、あそこの岩の上に座ったり寝転んだりして休みましょう」と言いました。私たちは「どうして岩の上なんですか」と聞くと、先生は「都会では自然や木々、セミの声などを感じることはなかなか難しいので、今月のような機会に、寝転んで自然を感じてみてください」と教えてくれました。日本で長く生活するにつれて、だんだんと日本人がどれほど自然を大切にしているのかを理解できるようになりました。





文化の違いに驚いたこと

来日したばかりの頃は、何もかもが新鮮で驚きの連続でした。たとえば、スーパーやコンビニでは、お客さんがきちんと決められた場所に並んでいること。電車に乗るときも、みんなが端に寄って並び、乗客が降り終わるのを待ってから乗り込むこと。当時の私はそんなことを知らず、ドアの前に立って、開いたらすぐ乗り込もうとしてしまいましたが、周りの人たちがきちんと待っているのを見て、初めてこのマナーに気がつきました。

また、自動車が必ず歩行者を優先することにも驚きました。歩行者の私を見かけると車がゆっくり止まって待ってくれるのですが、当時の私はまだ慣れていなくて、戸惑ってしまい、立ち止まってしまうことがありました。結局、私が先に渡らないと相手の車も動かないので、最後には私が歩き出してようやく車が進む、ということもよくありました。

日本人の先生の支出管理の仕方にも驚きました。生活費の支給と管理を担当してくれていた先生は、常にノートを持ち、支出を一つひとつ丁寧に記録していました。ノートにレシートを貼ったり、封筒に入れてノートに挟んだりして、とてもきちんと整理していました。ベトナムでは、少なくとも私の両親はそのような管理をしていなかったもので、とても新鮮でした。



「やはり海外に行くことは視野を広げてくれます。」

2019年に日本の大学進学準備のため予備課程に留学する前、私は自分の日本語や英語にはある程度自信がありました。すでにN2を取得していて、日本に行った経験もあり、いくつかのコンテストで賞を取ったこともあったからです。

しかし、実際に日本に来て予備課程で学び始めると、それが想像以上に難しいことに気づきました。さらに、英語圏やヨーロッパから来た留学生たちと一緒に学ぶ中で、自分の能力がまだまだ足りないと感じました。やはり海外に行くことは視野を広げてくれます。社会の中で自分がどれほど小さな一粒の砂に過ぎないかと強く感じました。

さらに、初めて家族から離れて長期間海外生活することになり、奨学金で経済的にはそれほど厳しくないとはいえ、お金の管理、時間の使い方、勉強と生活、そして身体的・精神的な健康のバランスを取る方法を学ばなければなりませんでした。最初の頃は、私生活が乱れたように感じましたが、だんだん慣れてきました。これは海外で生活を始めた人が誰でも最初に直面する問題ではないかと思います。

日本の社会に溶け込むことと自分の文化を見失わないこと

1年間の予備課程を終えてから、日本の大学で学ぶことになりました。当時、留学生は私一人だけだったので、周りの学生からはちょっと「珍しい存在」のように見られていた気がしました。もちろん、外国人と交流するのが好きな人もいて、声をかけてくれたり友達になってくれたりすることもありましたが、ほとんどの人とは挨拶やちょっとした会話だけで、親しい友達になるのはなかなか難しかったです。やっぱり、日本人の学生と同じように流行や話題を共有することができなかったからだと思います。そのせいで、最初の頃はけっこう苦労しました。でも、それを乗り越えたいと思って、自分からできるだけ積極的に交流するようにしました。そうしているうちに、だんだんと状況は良くなっていったと思います。

しかし、彼らに溶け込もうと努力する一方で、自分自身、つまりベトナム人としてのアイデンティティを少しずつ失っているように感じました。そのため、私はベトナムに関する活動にも積極的に参加するようにしました。たとえば、子どもや中学校・高校向けのベトナム文化紹介イベント、あるいは公民館などで行われる活動によく参加しました。

特に、公民館の活動では、皆さんの学ぶ姿勢にとっても感銘を受けました。60〜70歳になっても熱心にベトナム語を学び、自ら積極的に調べたり、質問をしたりしています。本当に学ぶことに一生懸命で、地域社会に貢献できる活動によく参加しています。年齢を重ねても常に新しいことに挑戦し、学ぼうとする姿勢は本当に尊敬に値すると思います。だからこそ、日本の平均寿命は他国と比べてとても高いのだと感じます。さらに、高齢の方々に向けて発表や説明をすると、ベトナム人の私自身でもよくわからなかった、あるいはこれまで気づいていなかったような質問を受けることもよくあります。やはり、日本の生活は、日本の言語や文化を学ぶ機会であると同時に、自分自身のこと、そして自国文化への理解を改めて見つめ直す良い機会にもなっていると感じています。



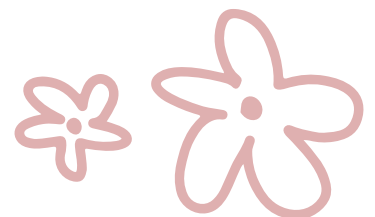


日本の部活から学んだこと

日本の大学で部活に参加して、学べるのが本当にたくさんありました。日本の課外活動がどう進むのかをはっきり実感しました。課外活動といっても、皆さんは時間と手間をかけてとても丁寧に取り組めます。

当時、私がSNSの投稿やチラシ、ポスターのデザインを任されたとき、ベトナムでも似たタスクをしていたので、作ってから共有し、フィードバックを受けて修正するような流れだろうと考えていました。基本的な流れは同じですが、いくつか驚いた点がありました。作業を始める前に必ず引き継ぎミーティングがあり、そこで前年の担当の先輩が業務の進め方をまとめた引き継ぎファイルを共有してくれるのです。そのミーティングはおよそ1時間で、先輩がとても丁寧に説明してくれました。例えば、昨年このデザインを進める際には最初に誰に何の目的で連絡するか、どのアプリを使うか、配色はどう決めるか、印刷はどこで行うか、必要な備品はどこで借りるかなど。とても細かい引き継ぎでした。

最初はとても驚いて、「なんでこんなに手間がかかるんだろう」と思いました。でもよく考えてみたら、それがとても良いことだと感じるようになりました。将来仕事をするときにも、このような細かさや丁寧さが求められるはずですし、それに慣れておくことは大切だと思います。さらに、このやり方は新人が戸惑わないようにするためでもあります。先輩からいろいろな情報や経験の学びがあるので、安心してタスクに取り組めます。後輩への丁寧な引き継ぎは、とても素晴らしいことだなと感じました。特に、自分がその指導を受ける立場になると、本当にありがたい気持ちになります。もちろん、ときには少し手間がかかって大変だと感じることもありますが、それこそが高いプロ意識の表れであり、日本人が仕事の質を維持し、新人が戸惑わずに成長できる仕組みなのだと思います。





あなたへのヒント

日本での習慣、例えば公共场所での順番待ちのマナーや交通ルールの守り方は、最初は少し戸惑うかもしれません。しかし、観察して真似をすると、だんだん慣れてくるということが Lan Chiさんの経験からわかります。

外国人と一緒に勉強したり働いたりすると、自分の力が思ったより小さいと感じることもあります。そんなときは落ち込むよりも、新しいことを学んだり、自分の視野を広げたりするきっかけとして受け止められるといいかもしれません。

また、日本には世代を超えて経験を引き継いでいく素晴らしい文化があります。丁寧に指導してもらえるときには、それを大切に心に留めておいてください。いつか自分が新しく入ってきた人にその経験を伝える側になるかもしれないからです。



